

## 在外研究便り

森川眞規雄

MORIKAWA Makio

昨年5月に当地北京に来て、はや9カ月になろうとしています。僕が所属しているのは、中国社会科学院経済研究所というところで、中国経済についてはもっとも権威ある研究機関の一つということになっています。ただ、ちょうど10年前に在外研究で香港の中文大学にいた時はそこでの教育義務があり、日々慌しく過ごしていましたが、今回は社会科学院ではなんの義務もなく、週に1、2回は「通勤」しますが、出勤してももっぱら先生方と雑談をしているばかりです。いや、社会科学院だけでなく、今回の在外研究は日々雑談で過ごしているといってもいいかもしれません。実を言うと、今回の在外研究のはじめは雑談もできず不満のたまる毎日でした。6月には大腿関節の異常で1カ月ほど痛みで外出できず、それが終わったら突然のぎっくり腰で4、5日はソファに寝た切りで、その後も2カ月ほどはほとんど外出できませんでした。しかたがないので寝たままでも3カ月ほどはもっぱら中国語の勉強だけでした。ただ、そのおかげで、秋口にはなんとか雑談ができる語学力がついたようで、以来、大いに雑談にいそんでいます。僕にとって雑談はきわめて大切で、いわば研究の中核をなしているといってもいいほどです。というのも、香港研究は30年ちかくもやってきましたが、中国は僕には全く新しいフィールドで、この社会についての膨大な情報を体感的にしかもなるべく短期間で身につけるには広範な人々と雑談をし続けることがもっとも有効だからです。人類学者が一つのフィールドを有効に活用できるようになるには普通2、3年の時

間が必要だと思いますが、僕の年齢ではそれほど悠長に時間を使うわけにはいかないので、いわば真剣に雑談に取り組んでいます。

さて、こちらでの僕の研究ですが、「香港モデルとの比較における中国都市部の近代化の研究」ということになっています。東アジアの近代化（こちらの言葉では「現代化」ですが）といえ、僕には1980年代の香港の近代化が強烈なイメージとしてあります。ほんの4、5年のうちに香港では伝統社会的要素が急速に後退し、近代的かつ独特の市民社会が出現しました。それまで猜疑心が強く、家族や伝統的紐帯のなかに埋もれてきた移民たちが、ある時期を境に、効率の重視、自己責任、清潔さ、マナーのよさ、洗練された美意識、小範囲の親族を含んだ緩やかな個人主義、といった近代的な特徴をもった市民に変身したのです。こうした香港の近代化と比較して中国をみるというのが基本的な目的ですが、ただ、現在の中国では香港と比較できるような明確な変化はあまりみられません。おそらくは、一部地域の急速な経済発展と他地域の停滞、権威主義的な政治支配とそれに依存的な市民意識、未発達な中流階層（といってもそろそろ人口の2割にせまっていきそうですが）といった事情がそれを阻んでいるといえるでしょう。北京は一見したところ超近代的な都市ですが、ここでも事情は同様で、現代的な外観の内では市民の意識はむしろ、規制のない利己主義（僕は我主義といっていますが）、無責任さ、親族的紐帯、「関係（guanxi）」といったむき出しの資本主義と伝統意識がないまぜになった状

態にあるようです。ただ、そうしたなかでも経済の急速な発展に支えられて、多少の変化は出現しつつあります。一部の企業では、従来の「ルールなき資本主義下の競争」から、社会的に認知された「威信」をもった安定企業の位置を求める動きがみられるし、中流層の一部では経済的向上を求めるよりは、生活に知的・文化的な価値を重視する傾向がみられる。また、伝統文化・芸術の再評価やそれにもとづく美意識の探究も最近では顕著にみられます。こうした傾向の一つ一つにアンテナをはっていくのが、いまのところ僕の「近代化研究」ですが、なかでも企業の社会的「威信」について最近大きな興味をもっています。中国の体制では大企業は多少とも国営またはもと国営、半

国営が多いので、「威信」は国からやってくるといってもいいのですが、それ以外の無数の中小の企業についてはそうした道はなく、また、体制上民間経済団体やロータリークラブのような「威信」団体に所属する方策は採れません。「法輪講」にみられるように、民間団体が力をもつことに政府は極めて敏感です。それでも威信を求める企業や企業人は多いし、実際にそれなりの威信を達成するものも多くある。こうした状況のもとで「威信」はいくつかの「私的」なネットワークの重なりの中かで達成されてゆく様子が少し見えてきました。ただ、具体的なメカニズムはまだまだ不明瞭で、5月までの約3カ月もさらに「雑談」を続ける必要があるようです。